



No.71 Dec.2018



■ カンボジアプロジェクトの現状 西トップ遺跡の調査と修復

奈良文化財研究所では2002年より、カンボジアのアンコール・トム内に位置する西トップ遺跡で調査をおこなってきました。西トップ遺跡は東面する3祠堂構成の遺跡で、東前面には低いテラスが付属します。これまでの調査によって14世紀を中心とした時期に、相次いで砂岩製の基壇と祠堂が建てられたことがわかっています。その後、2012年に南祠堂の解体から修復を始め、2020年の完成に向けて作業はいよいよ佳境に入ってきた。南祠堂は2016年に一応の完成をみて、そのあとしばらく細かな手直しを続けながら、北祠堂の解体に入りました。

北祠堂は南祠堂に比べ崩壊が激しく、まず全体の3D測量をおこなってから、手測りの図面を作成しつつ解体をおこないました。最下段の石材をはずす工程で、基壇中央部にレンガを組み合わせた縦横約2m、深さ1.6mの遺構が発見されました。火を受けた金属片や骨片等が出土したことから火葬儀礼をおこなった遺構と推定しました。その後、再構築を続け2017年12月にはほぼ再構築を終え、屋蓋部の破風の復元を続けながら中央祠堂の解体に着手しました。

中央祠堂は崩壊防止のため足場材で補強をおこ



中央祠堂 上成基壇外装砂岩の解体(南東から)

なっていたため、各段の図面と写真を撮りながら足場の解体とともに石材をはずしていく工程となりました。中央祠堂は現存で約8mの高さがあり、上から屋蓋部、軸体部、基壇部の3部構成で作られています。屋蓋部はせり出しアーチ構造で構成される屋根が幾重にも重なる構造ですが、軸体部の西北隅を中心に崩壊が進んでおり、かろうじて東面と南面が残るだけでした。解体と並行して仮組を進めた結果、第1破風から第5破風まで、如来座像を主尊とする破風が上下に連なる高い尖塔形式に復元されることがわかつてきました。

現在は左の全体写真にみるように、中央祠堂は軸体部が解体され、基壇部の実測調査と解体に着手しています。外側にみえている砂岩の基壇外装の内側には、前身建物にともなうラテライト積み基壇が存在しており、11月中旬には写真右にみるようにラテライト積み基壇の南西コーナー部があきらかになりました。

今後はこのラテライト積み基壇の調査をおこなった後に、下成基壇南西隅から基壇の再構築を進めていく予定です。来年2019年の年末頃までは、軸体部まで再構築を終え、往時の姿を取り戻す予定です。その後、周辺整備をおこない、2020年度末の事業終了を目指しています。

(企画調整部 杉山 洋・佐藤 由似)



中央祠堂前身ラテライト基壇 建築班調査風景(西から)



発掘調査の概要

藤原宮大極殿院北面回廊・北門の調査(飛鳥藤原第198次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、近年、藤原宮中枢部分の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。今年度は、2018年5月28日から10月12日にかけて、大極殿院北面回廊の中央部1,050m²を発掘調査しました。昨年度実施した第195次調査では、大極殿院回廊の東北隅部を検出し、北面回廊東部の柱位置や柱間寸法が判明しました。これを受け今回の調査では、第195次調査区西側の北面回廊中央部を調査し、北面回廊全体、北門の位置や構造の解明に取り組むことにしました。

調査の結果、礎石そのものは遺存していませんでしたが、礎石を据え付けた痕跡(礎石を据えるための穴と根石)を25ヵ所検出しました。そのうち2ヵ所は、北面回廊ではこれまで未検出であった北側の柱列をなすもので、これにより北面回廊は、南面・東面と同様に柱が3列並ぶ複廊の構造であったことがあきらかになりました。

柱間寸法は、これまでの大極殿院回廊の調査所見と同様、桁行約4.1m(14尺)、梁行約2.9m(10尺)となります。ただし、藤原宮の中軸線が通る中央間のみ桁行を2尺広げて16尺としており、この部分を出入口とする北門の存在があきらかとなりました。また、大極殿院の東西幅については、昨年度検出した回廊東北隅から中軸線までの距離が約58.3m(200尺)となるため、北面回廊全体では400尺となることが判明しました。あらためて、藤原宮大極殿

院が高度な設計・施工技術によって造営されていたことが裏付けられました。

今回の調査では、大極殿院内庭北辺部の整備状況もあきらかとなりました。これまで大極殿院内庭では、南部で礎敷を検出していましたが、今回、北部でも同様に礎を敷いて整備されていることがあらたに判明しました。ただし、中軸付近では礎敷が上下2層にわたって敷かれていました。内庭北部では、まず中央部分にのみ礎を敷き、その後、あらためて東・西隅部まで礎を敷いた可能性があります。

また、造営時および整備完了後に内庭側に溜まった雨水を排水するための南北溝を2条検出しました。このうち、造営時に設けられた1条は、基壇裾に掘られた東西溝からの水を受け、瓦詰めの暗渠として基壇を横断し、北へと排水していました。もう1条は、内庭側の整備が完了したのち、再度、基壇を掘り込んで設置されており、内庭に溜まった水を排水するために臨時に掘られた溝と考えられます。北側が低い藤原宮の地形では、北面回廊の内側に絶えず雨水が溜まる状況にあったようで、排水にかなり苦慮していた様子がみてとれます。

今回の調査区は、大部分が1977年に藤原宮第20次調査として一度調査をおこない大きな成果があがった部分に該当します。この40年間の調査の蓄積を受け、新たな問題意識のもと調査に臨んだ結果、以上のように多くの新知見を得ることができました。この間、研究が着実に進歩してきたこと、さらには長期にわたり継続的に調査を積み重ねることの重要性を再認識した調査となりました。

9月15日には現地説明会を開催し、694名の方々に参加いただきました。(都城発掘調査部 廣瀬覚)



調査区全景(南西から)



北面回廊と内庭の礎敷(西から)

東大寺東塔院跡の調査(平城第600次)

奈良文化財研究所は、東大寺、奈良県立橿原考古学研究所とともに史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、3年前から境内整備事業の一環として東塔院跡の発掘調査を実施しています。今回の調査は、東塔を取り囲む廻廊と南門、東門の様相解明を目的として実施しました。今年度の調査は2018年7月2日から継続中です。

東塔院は、当代唯一の高さを誇った七重塔である東塔とそれを取り囲む廻廊からなります。これらの建物の創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末の平重衡による南都焼き討ちで焼失しました。鎌倉時代に入り再建されるものの、南北朝時代に雷火により再び焼失し、それ以来再建されることはありませんでした。これまでの調査では、東塔院全体で鎌倉時代再建期の遺構が確認されており、東塔基壇では奈良時代創建期の遺構もみつかっています。

今年度の調査では、南門と東門での鎌倉時代再建期の遺構と、廻廊での奈良時代創建期と鎌倉時代再建期の2時期の遺構を確認しました。以下、この2つの成果について詳しく述べます。

まず、門の調査では、鎌倉時代再建期の様相があきらかになりました。昨年度からの継続調査となつた南門では、東塔基壇との間にある階段と参道の痕跡が今回新たにみつかり、階段は南門の中央間に、参道幅は東塔南面の階段に幅を揃えていることがわかりました。また、東門では基壇上に礎石や凝灰岩・花崗岩の敷石が残り、その規模が梁行2間、桁行3間であることも判明しました。

東塔院の四隅に調査区を設けた廻廊の調査では、東塔基壇以外ではじめて奈良時代創建期の遺構を

確認しました。そして、驚くことに鎌倉時代の再建にあたって、以下のように建築の構造を大きく変えたこともあきらかになったのです。

奈良時代の創建廻廊は東西南北四面とも複廊で、桁行約3.6m(12尺等間)、梁行約3.0m(10尺等間)と推定されます。礎石はすべて抜き取られていましたが、北面廻廊の棟通りには、仕切り壁の下に敷いたと考えられる磚が並んで出土しました(敷傳列)。この磚は、東面廻廊の礎石の抜取穴等からもみつかっており、本来は他の廻廊にも敷かれていたようです。

いっぽう、鎌倉時代再建廻廊は南面が複廊のままであるが、その他の北、東、西面はすべて単廊に改造されます。複廊である南面は桁行約3.1m(10.5尺等間)、梁行約3.0m(10尺等間)で創建廻廊と同規模ですが、その他の単廊部分では、桁行約3.1m(10.5尺等間)、梁行約4.8m(15.5尺)と推定されます。廻廊の北西隅部分では礎石が3石遺存しており、規模確定の決め手となりました。

鎌倉時代再建にあたっての単廊への改造は単に建物だけにはとどまりません。奈良時代創建基壇を北面と東面では内底部側を、西面では内底部と外周部の両側を大きく削り、基壇自体の幅を狭くしていました。鎌倉時代再建期には、東塔本体の構造を大きく改変していたことがあきらかになっていますが、それは廻廊にもおよんでいたのです。

11月11日には現地説明会を開催し、1,148名の方々に参加いただきました。

今後、引き続き東塔院の門についての調査を実施する予定です。来年度以降の調査にもぜひご注目ください。
(都城発掘調査部 芝 康次郎)



東塔院北西隅の廻廊礎石と雨落溝(北西から)



東塔院北東隅の廻廊基壇(南西から)

奈文研ギャラリー (63)
奈文研本庁舎敷地の遺構表示



今年、奈良文化財研究所の本庁舎が無事に完成し、2018年6月20日に竣工記念式典を行いました。その後、この庁舎の建て替えにともない、本格的な発掘調査をおこないました。その結果、平城京造営に関わる大なり、敷地内にその遺構を表示することになりました。

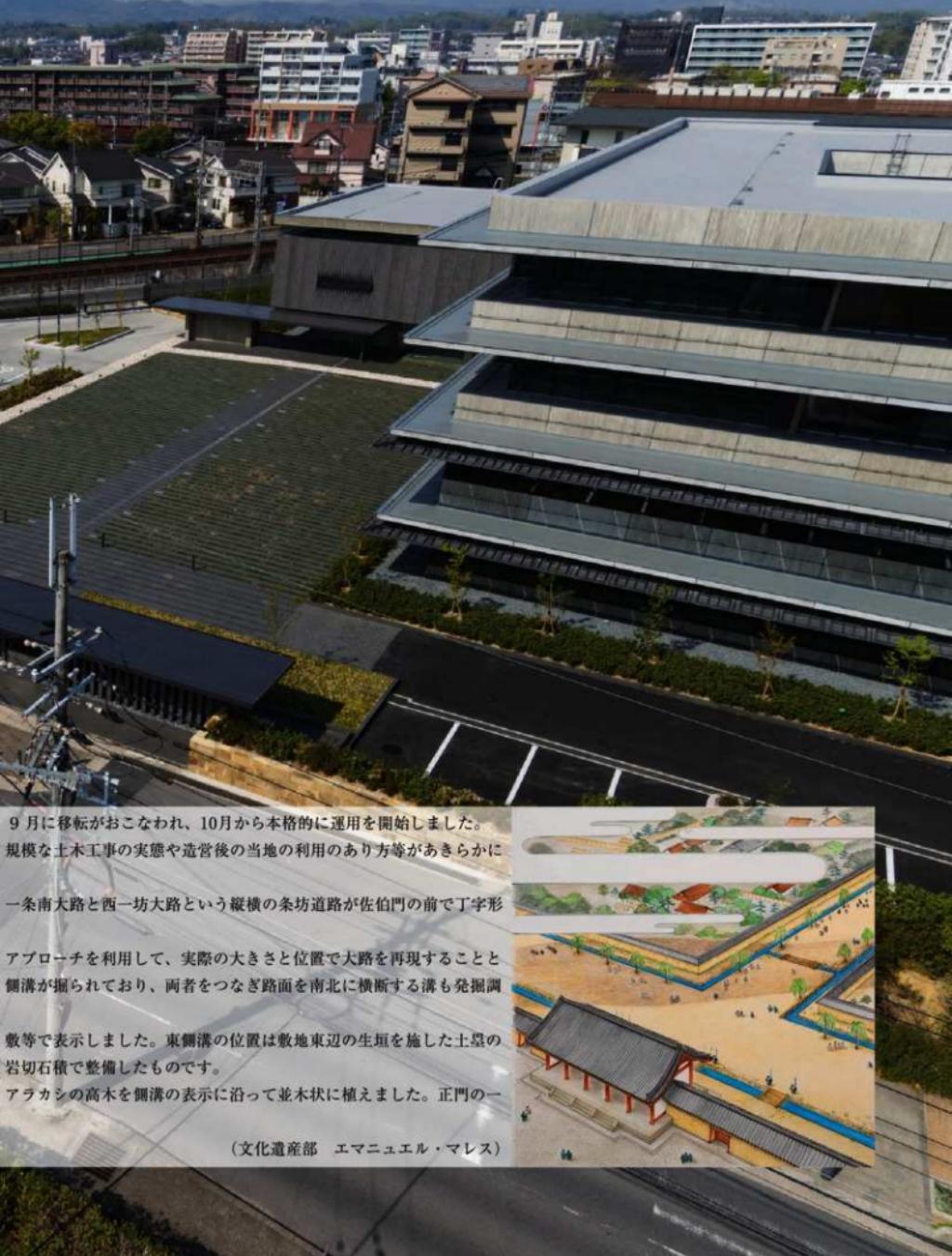
奈文研の本庁舎が建っている場所は、平城宮の西面中央に開く佐伯門の正面にあたります。奈良時代には、に交差し、右のイラストに見られるような風景が広がっていました。

本庁舎の設計にあたり、佐伯門の真向かいに正門を配置し、そこからエントランス棟の正面入口にいたしました。路面の範囲は濃灰色の切石で舗装し下草のスリットを入れました。路面の南北には排水のための柵で確認しましたので、これらを白色の玉石敷で表現しました。

西一坊大路も敷地内に含まれ、こちらの路面も濃灰色で舗装しました。側溝については西側溝のみを玉石位置にあたります。この土壌は既に整備されていた平城宮跡西辺の境界土壌の意匠にあわせて1980年に凝灰

敷地の南部では西一坊大路の雰囲気を出すために、奈良時代にも街路樹として使われていたエンジュと、対のサクラは平城宮跡内のサクラ並木との連続性を意図したものです。

敷地内の表示と佐伯門の基壇整備を手掛かりに、1300年前の平城京の風景を想像してみてください。



9月に移転がおこなわれ、10月から本格的に運用を開始しました。
規模な土木工事の実態や造営後の当地の利用のあり方等があきらかに
一条南大路と西一坊大路という縦横の条坊道路が佐伯門の前で丁字形
アプローチを利用して、実際の大きさと位置で大路を再現することと
側溝が掘られており、両者をつなぎ路面を南北に横断する溝も発掘調
査等で表示しました。東側溝の位置は敷地東辺の生垣を施した土壌の
岩切石積で整備したものです。

アラカシの高木を側溝の表示に沿って並木状に植えました。正門の一



(文化遺産部 エマニュエル・マレス)

韓日発掘交流を終えて

私は国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所の発掘調査交流の一環として、2018年8月6日から9月28日まで、奈文研において複数の調査研究業務を体験する貴重な機会を得ました。

慶州で調査を担当してきた遺跡は新羅古墳でしたが、今年は東宮と月池内でも正殿と推定される大型建物跡を発掘してきたことから、奈良文化財研究所の調査内容と共通する部分があり、様々な点で良い経験となりました。

8月は、平城京内の法華寺南側区域の調査に参加しました。水が湧き出る低湿地という環境に全員が苦労ましたが、奈良時代の柱根や、木簡、曲物等の有機質遺物は、韓国ではなかなか扱う機会がないため、興味深いものでした。

9月に経験した藤原宮の調査現場も、大極殿院の北門・北面回廊と排水溝、およびそれ以前の遺構との複雑な重複関係をあきらかにする重要な成果に接する良い機会でした。特に、悪天候の中、現地説明会に600人以上が参加する様子に、一般の方々の考古学と歴史に関する熱意を感じ、印象的でした。

発掘調査以外にも、奈文研所蔵の膨大な数量の木簡、多様な研究テーマ、実地調査で訪れた大阪、東京、島根等の博物館や遺跡は、私自身の研究に大きな刺激となりました。

つたない日本語にもかかわらず、2ヵ月間の日程を無事に終えることができたのは、奈文研の皆様のおかげです。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後の両機関の持続的な交流・協力を願っております。

(国立慶州文化財研究所 尹亨準、翻訳 松永悦枝)



藤原宮大極殿院北門跡での調査風景

「奈良の都の木簡に会いに行こう!2018」 (日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンスプログラム)の実施

2018年8月21日・22日、小・中学生向けのプログラムとして、「奈良の都の木簡に会いに行こう!2018」(共催日本学術振興会、後援奈良県教育委員会・奈良市教育委員会)を実施しました。昨年に続き2回目の開催となる今回も、リピーターを含め予想をはるかに上回る多数のみなさまにご応募いただきました。今年もプログラムの運営を工夫し、小5から中3までの応募者全員(計49名)と保護者の方々にご参加いただくことができました。

開講式後、まず「木簡に会ってみよう」では、本物の木簡(水漬け・保存処理済み)をじかにじっくりと観察しました。そして用意した木簡で、参加者自身の名前に使われている漢字探しをしました。木簡と古代の漢字に親しみをもってもらおうという趣向です。また、木簡に関する基礎的な情報についても話を聞きました。

「木簡を探してみよう」と「木簡に触れてみよう」は、発掘現場から持ち帰った土を洗浄・分別して遺物を探し出す作業と、収蔵庫に保管してある木簡の水替え作業を体験しました。

2つの作業の合間のお昼には、奈良パークホテルのご協力により、木簡に登場する食材で復元された古代食を味わいました。食後には根柢になった木簡の説明も聞きました。食事はまさに生きた教材です。

最後の「木簡を読んでみよう」では、奈良文化財研究所の序舎下で、平城京造営時に秋篠川旧流路を埋め立てた土からみつかった「奈良京」と書かれた木簡の解説に挑戦しました。その準備として左半を隠した文字を読んだり、同じ偏や旁をもつ漢字を考えたりするクイズにも取り組みました。

このように、プログラムは、座って話を聞くのではなく、作業を中心とした実習・体験型で構成しました。



水替え作業の様子

1200年以上も前のモノのもつ力を実感していただけたのではないか。 (副所長 渡辺晃宏)

東院庭園 庭の宴

2013年から継続し今年で6回目となる、奈良文化財研究所主催の東院庭園庭の宴を2018年9月22日開催しました。今年度から平城宮跡の活用に関する実践的な研究と位置づけて、文化遺産部遺跡整備研究室を中心に準備をしました。観覧者約200人がきれいな月を観ながら古代食と白酒（奈良パークホテル提供）を味わいました。

今年のテーマは称徳天皇の時代の「東院玉殿の完成」です。『続日本紀』神護景雲元年（767）4月14日条には東院の玉殿が新たに完成し、群臣が集まって祝ったこと、その建物には瑠璃色の瓦を葺き、水草の文様を描いたことが記されています。これに関連し、福嶋啓人研究員が「東院庭園の復元建物について」、岩戸晶子主任研究員が「東院玉殿に葺かれた緑釉瓦について」と題したミニ講演をおこないました。また、雅楽演奏家の太田豊氏らによる、雅楽歌謡である催馬樂「更衣」、東大寺大仏開眼法要に際して演來した僧仏哲が伝えたとされる舞楽「陵王」等が演奏されました。

古代衣装のファッショショーンショーは、玉殿完成の祝いの後に、天皇と限られた側近の者が内輪の宴を東院庭園でおこなったという場面設定です。同年2月14日、天皇が東院に出御し、出雲国造出雲臣益方が神事を奏して外從五位下を授けられ、同行した祝部（地方の社の下級神職）らも位等を与えられたことに因み、宴に先立ち、称徳天皇から出雲臣益方が位記を授与され、祝部が舞を奉納する演出とし、巫女の経験のある研究員が舞を披露しました。

平城宮跡の活用方法については夜間の東院庭園に限定せず、新たな展開を考えたいと思っております。

（文化遺産部 内田 和伸）



祝部による舞の奉納

東京講演会を開催

2018年10月13日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、第10回東京講演会を開催しました。この東京講演会は、日頃、関西を中心活動している奈良文化財研究所の調査・研究活動の成果を、広く東日本の皆様にご紹介することを目的に2010年から始めた企画です。毎回、切り口を変えて文化財研究の魅力や面白さ、最新の話題をお伝えしており、今回は「藤原から平城へ—平城遷都の謎を解く—」と題して開催しました。

藤原京は694年に完成し、飛鳥から藤原へ遷都しました。条坊街区を備えた藤原京は、天武天皇と持統天皇が国家の威信をかけて造営した律令国家建設のまさにシンボルでした。ところが710年には平城京への遷都がおこなわれ、藤原京はわずか16年の短命に終わってしまいました。平城遷都、藤原廢都をめぐっては、これまで様々な解釈がなされてきましたが、どれも定説にはいたっていません。

今回の講演会ではあえてこの平城遷都の謎に挑むことにしました。平城宮跡に関わる文献資料、建物の移築、儀式にともなう輶旗遣構、瓦からみた造営過程、藤原京の造営思想、奈文研本府舎建設にともなう発掘調査であきらかになった平城京建設の大土木工事等、様々な観点から総合的にこの謎に迫り、日本古代国家の建設過程の実態解明に重要な成果をあげた最新の調査研究事例を6名の研究員から紹介しました。

当日の来場者は530名で、10時から16時にわたる長丁場の講演会でしたが、メモを取りながら熱心に聴き入る方々も多く見受けられました。多数の方にご来場いただき、ありがとうございました。

（研究支援推進部 津田 保行）



講演会風景

飛鳥資料館 冬期企画展 「飛鳥の考古学2018」

今回の展覧会では、2017年度に飛鳥・藤原地域でおこなわれた発掘調査の成果と、近年、調査分析の進展がみられた石碑遺跡等から出土した多数の土器を展示します。

飛鳥中枢部においては、小山田遺跡（小山田古墳）で横穴式石室の痕跡が調査され、この古墳が石舞台古墳に匹敵する石室をもっていた可能性が高まりました。飛鳥寺西方遺跡では、飛鳥時代の石組漾や建物跡がみつかり、これまでの調査成果とあわせ、「櫻木の広場」推定地における土地利用の具体的な状況がわかつきました。山田寺の西600m付近でおこなわれた山田道の調査では、古墳時代後期に造られた池や飛鳥時代中頃に設置された山田道を確認しました。また、飛鳥寺北邵部域では、幅約1.5mの狹小なトレンチ調査でしたが、160点を超える軒瓦等、大量の遺物が出土しました。

さらに、飛鳥の周辺部においては、四条1号墳の再調査により、古墳の規模のより確実な復元が可能になりました。与楽古墳群にある与楽イモリ1号墳では、石室内から多数の副葬品がみつかり、渡来系氏族の奥津城の一縮を知ることができます。

この冬は、これらの発掘調査と最新研究による飛鳥の新発見をぜひお楽しみください。（飛鳥資料館 若杉賀宏）

会期：2019年1月25日（金）～3月17日（日）月曜休館（祝日の場合は翌平日）※2月3日（日）、24日（日）は無料入館日
開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：0744-54-3561



坂田寺跡 池 SG100
出土土器群

平城宮跡資料館 展示紹介 「資料館の中庭」

意外と知られていませんが、平城宮跡資料館は中庭にもいくつかの石製の展示品があります。サンルームの休憩室を出ると、右手すぐには高さ1mほどの標石が立っています。これには「從是東 平城宮(これより東、平城宮)」と刻まれています。戦前に設置されたものようですが、説明は不明で、現在調査中です。次いで、正面の池に注目。池の中には、6つの大好きな石が並べられ、蹠も敷かれています。これは、奈良文化財研究所が1969・70年(昭和44・45年)におこなった平城宮跡左京一条三坊十五・十六坪の発掘調査で検出した圓池の景石等を移築したものです。最後に中庭北西隅をご覧ください。とても大きな立方体の石が目に入ります。これは、平城京の正門である羅城門の礎石です。1935年(昭和10年)の佐保川改修工事の際に、羅城門があった太和郡山市米世橋付近でみつかった4つの礎石の内の一つです。



資料館の中庭

平城宮・京の調査研究と保存の歴史を伝える資料館の屋外展示資料にも、ぜひご注目ください。

(企画調整部 加藤 真二)

■ 記 錄

文化財担当者研修(専門研修)

- | | | |
|------------------|--------------------|-----|
| ○遺跡情報記録課程 | 2018年9月18日～9月21日 | 21名 |
| ○低湿地遺跡調査課程 | 2018年10月3日～10月5日 | 8名 |
| ○保存科学 I（金属製遺物）課程 | 2018年10月9日～10月17日 | 12名 |
| ○文化財写真課程 | 2018年11月26日～12月6日 | 20名 |
| ○報告書編集基礎課程 | 2018年12月13日～12月20日 | 15名 |

第123回公開講演会

- 2018年11月10日(土) 163名
飛鳥資料館 秋期特別展
10月5日(金)~12月2日(日) 7,492名
「よみがえる飛鳥の工房—日韓の技術交流を探る」

平城宮跡資料館 秋期特別展

10月13日(土)~11月25日(日) 15,853名

「地下の正義」

- | 開催地説明会等 | 回数 | 開催日 | 開催場所 |
|-------------------|--------|----------------|------|
| ○東大寺東塔院跡発掘調査 | 1,148名 | 2018年11月11日(日) | |
| ○平城第602次調査(東区朝堂院) | 560名 | 2018年12月15日(土) | |

最近の本

- 『デジタル技術で魅せる文化財—奈文研とICT』
(株)クバプロ 2018年4月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>
Eメール jimu@nabunken.go.jp
発行年月 2018年12月